

4971 **メック**

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長

業績は堅調に推移、タブレット不振で通期予想を修正

◆2016年3月期第3四半期の業績

第3四半期連結累計期間の業績は、売上高 67 億 53 百万円(前年同期比 1.1%減)、営業利益 16 億 2 百万円(同 3.3%増)、経常利益 16 億 40 百万円(同 0.5%減)、純利益 11 億 97 百万円(同 9.8%増)となった。薬品売上高は 65 億 31 百万円(同 2.7%増)で、売上高に占める割合は 96.7%であった。海外売上高比率は 3 ポイント上昇し、54.9%となった。なお、当社薬品海外使用分の国内代理店販売を海外売上高に加算した場合の比率は 75.8%である。CZ シリーズの売上高は 34 億 49 百万円で、薬品売上高に占める割合は 52.8%となった。粗利率は 2.9 ポイント上昇し、66.6%という結果となった。為替の影響は、売上高が 3 億 43 百万円増、営業利益は 69 百万円増となっている。

また、1月29日付で通期連結業績予想を修正した。修正後の売上高は 90 億円(前回予想比 4 億 20 百万円減)、営業利益は 21 億円(同 50 百万円減)、経常利益は 21 億 50 百万円(同 50 百万円減)、当期純利益は 14 億 50 百万円、1株当たりの当期純利益は 72.94 円とした。修正の理由は、世界的なタブレット PC の不振によりタッチパネル向け薬品の低調、銅箔等電子基板用資材の取り扱いの減少である。しかし、薬品の利益率がよかったこともあり、利益の修正は大きくない。

連結損益計算書に関しては、売上高 67 億 53 百万円のうち、薬品が 65 億 31 百万円(前年同期比 2.7%増)、機械が 87 百万円(同 6.8%増)、資材が 1 億 19 百万円(同 67.4%減)である。売上総利益は、薬品の売上増および薬品の売上構成比率の増加により 44 億 95 百万円(同 3.4%増)となった。販管費は人件費の増加により 28 億 93 百万円(同 3.5%増)となった。営業利益の為替による影響は 89 百万円増である。法人税等は、前年同期は台湾の留保金に対する税制改正があり、税額が多かったが、当期は 4 億 37 百万円(同 1 億 19 百万円減)で減少となった。

貸借対照表に関しては、有形固定資産の土地に為替差等による 27 百万円の減少があった。建設仮勘定の 9 億 61 百万円増は、建設中の尼崎事業所関係と基幹システム機器の入れ替え等による。投資その他の資産の投資有価証券は保有株式の時価下落等により 27 百万円の減少があった。その結果、資産合計は 156 億 65 百万円となっている。

一方、流動負債の未払い法人税は 1 億 38 百万円となった。その他 12 億 11 百万円は、主として尼崎事業所の設備関係支払手形の増加である。固定負債の繰延税金負債 22 百万円増は、主に子会社の留保金税効果額の増加による。株主資本は、利益剰余金が 106 億 76 百万円に増加したが、自己株式取得により 4 億 13 百万円の減少があった。その結果、純資産合計は 122 億 75 百万円で、自己資本比率は 78.4%となった。

キャッシュフローは、営業活動によるキャッシュフローが 10 億 51 百万円(前年同期比 2 億 61 百万円増)で、前期仕入債務の減少から当期は増加に転じたことにより、資金が増加している。投資活動によるキャッシュフローはマイナス 2 億 92 百万円(同 28 百万円増)、財務活動によるキャッシュフローは自己株式取得や配当金の増加によりマイナス 7 億 33 百万円(同 5 億 13 百万円減)で、資金が減少している。

◆主力の薬品が好調

当第3四半期の連結売上高は22億99百万円で、市況が低迷する中、堅調を維持した。タッチパネル用薬品は落ち込んだものの、フレキシブル基板の薬品やソフトエッチング剤、CZシリーズの増加が主な要因である。

営業利益は6億12百万円で、利益率の高いものが堅調だったことにより、今期で最も高い数字となった。経常利益は6億32百万円、純利益は4億94百万円で、対前期比で増益となっている。

品種別売上高は、薬品22億37百万円、機械18百万円、資材36百万円、その他6百万円となり、薬品が伸びた。薬品別では、銅表面処理剤が20億91百万円となった。カテゴリ別では、密着向上剤が13億71百万円で伸長した一方、エッチング剤が7億76百万円でほぼ横ばい、その他表面処理剤が89百万円で微減となった。

CZシリーズは、主力のCZ-8100が2億19百万円で微増、CZ-8101は5億93百万円で微減となったが、CZシリーズ全体としてはおおむね好調であった。

地域セグメント別では、アジアが10億26百万円で伸長した一方、日本が11億17百万円で堅調であった。海外売上高比率は54.9%である。

通期の連結業績予想は、売上高90億円(前期比99.4%)、営業利益21億円(同104.6%)、経常利益21億50百万円(同101%)、当期純利益14億50百万円(同107.9%)で、減収増益としている。営業利益率23.3%、経常利益率23.9%という見通しである。

◆業績を牽引する技術

当社のコア技術は三つある。一つ目は微細配線形成技術で、エッチング法により高密度配線パターン形成を実現するEXEシリーズがある。二つ目は密着向上技術で、銅と樹脂との密着強度を飛躍的に向上させる超粗化剤のCZシリーズがある。三つ目は表面処理技術で、金属を選択的にエッチングする選択エッチングがある。

当社が進出する分野は、PC、カーナビ、テレビ、デジカメ、携帯電話から、近年はスマートフォン、ウェアラブルなどに広がってきた。今後は、数は少ないが技術のリーダー的存在となるスーパーコンピューター、ロボット、医療機器などが期待できる分野となっている。その足がかりとなる技術が、EXEシリーズ、フラットボンド、AMALPHA(アマルファ)である。

EXEシリーズは、現状のエッチング剤に添加するだけで使用可能で、設備投資額が抑えられるというメリットがある。また、管理マージンが広く、エッチングスピードを落とさないため、特にHDI基板では生産性が向上する。主にCOF分野で実績を積んできたが、スマートフォンやタブレットPCのマザーボード等のHDI基板、フレキシブル基板にも広がりそうである。試験が終了して一部は立ち上がっており、来期以降、収益の寄与に期待している。

フラットボンドは表面粗化を伴わないため、高周波領域において伝送損失が少ない。高速伝送対応電子基板製造用には実績ができ、基地局やスーパーコンピューター等に採用されている。

AMALPHAは、樹脂と金属を直接結合させるための当社独自の金属表面処理技術である。樹脂と金属を界面レベルで接合させ、樹脂・金属一体成形部品を作り上げる。工程の簡略化、密封性や見た目の向上などのメリットがあり、携帯端末用の金属筐体で実績を積み上げている。用途例は、ギアの軽量化、コネクタの防水などである。ニーズは高まっており、今後は、産業用ロボットや車の軽量化にも注力していきたい。

当社の業績を牽引するのがパッケージ基板だが、フラットボンド、CZシリーズにおいては顧客のニーズに合わせてラインナップを揃えている。

事業領域の拡大を目指して、尼崎事業所を建設中で、進捗状況は順調である。今後は更に、グローバル展開、新製品の開発力を強化していきたい。また、液体の薬品を扱っているメーカーとして、保証体制を充実させ、顧客が世界中のどこにいても高品質な製品が作れるようにサポート体制の強化をはかっていく。

◆ 質 疑 応 答 ◆

営業利益率が上がった要因を詳しく教えてほしい。

利益率の高い薬品の売上げが増加したこと、利益率の低い取扱い品である銅箔やフィルム等を減らしているため。

スマートフォンにおける足元の事業環境を教えてほしい。

スマートフォンにおける CZ シリーズはまだ好調とはいえない。しかし車載での採用などでカバーしているため、全体的には CZ シリーズは落ちていない。今後、スマートフォンが落ちた場合でも、EXE シリーズなどの新しい薬品でスマートフォン向けの売上げ増は可能である。

EXE シリーズの HDI 基板などにおける評価試験の進捗状況を教えてほしい。

第 4 四半期になんとか立ち上げ、来期以降の収益の寄与に期待している。

テレビは 4K、8K の増加や新興国でのデジタル化で需要が見込める中、来期は EXE シリーズの伸長が期待できるのか。

テレビ向け EXE シリーズは、右肩上がりとはまではいかないが、しかるべきタイミングで再び伸び始めるとみている。

今後の事業展開を踏まえ、営業利益率はどの程度の改善の余地があるのか。

CZ シリーズは利益率の高い製品にシフトしている。また、テレビ向けに高いシェアがある EXE シリーズは HDI 基板やフレキシブル基板等の新しい領域に進出することで利益率が上がる余地は十分にある。新製品を開発し続け、常に新しい市場を開拓することで、利益率を上げていきたい。

(平成 28 年 2 月 2 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見るができます。

<http://www.mec-co.com/ir/library/>